

特集：ショッピングリハビリに関する学際的総合的研究

樺田 美雄

摂南大学現代社会学部

E-mail: yoshio.kashida@setsunan.ac.jp

Interdisciplinary and comprehensive research on shopping rehabilitation

KASHIDA Yoshio

Setsunan University

1 本誌の過去の特集は合計6回であり、そこには2つの流れがあった

『現象と秩序』誌の7回目の特集をお届けする。

本誌では、折に触れ「特集」を組んできた。最初は第4号に「小特集：専門職教育における社会学」を掲載し、中澤秀雄、金子雅彦、和泉俊一郎、本郷正武、樺村志郎の各先生から、大学における専門職養成に関して、各専門分野別に、社会学教育の意義・現状・未来を多面的に論じて頂いた。ついで第7号に「特集：多文化異文化交流と学園都市的食生活」を掲載し、研究資金を得て行った共同研究（助成タイトル「未来の学園都市一世代間・異文化間・大学内外間交流の促進による健康で多文化共生的な学園都市的食生活を、生協食堂における『健康栄養相談会のワークショップ化』を通して獲得するー」）の成果を3つの論文にまとめて掲載した。

以後も本誌は、第8号、第9号、第11号（特集1と特集2の2つの特集を掲載）、と特集を巻頭において刊行をしてきたが、これらの特集には、大きく分けて2つの流れがあるわち、第1の流れは、日本社会学会でのテーマセッションを基盤とした特集（第4号、第8号、第11号の特集1の各特集）であり、第2の流れは、研究資金を得て行った共同研究を基盤とした特集（第7号、第11号の特集2の各特集）である。

2 前者の流れは「社会学革新運動的背景」をもった流れ

前者の流れ、すなわち、学会大会でのセッションを基盤とした特集の流れには、社会学革新運動的背景があるということができるだろう。

たとえば、第4号や第8号の特集は、近代日本の大学における、旧帝大中心主義（文学部哲学科社会学専攻中心主義ともいえよう）を乗り越え、社会学の中心と周縁の構造を、周辺部分の活性の高さを活用する形で逆転させようという<社会学革新運動>的側面があったことができるだろう。また、第11号の特集1「学問の不可視の前提を外して研究しよう」に関しては、上記の<社会学革新運動>に、<方法的裏付け（周辺的研究手法の意義を主張することで、中心と周辺とのポジション交替を図るような方法的裏付け）>

を付隨させることによって、革新への実態的裏付けを提供しようとした、と分析でき、したがって、そこにもまた社会学革新運動的含意を読み取ることができるだろう。

3 後者の流れは「学術研究環境の構造的欠損への対応」という意義をもった流れ

これに対し、後者の流れ、すなわち、各種研究費での共同研究を基盤とした特集の流れには、学会での共同セッション的企画数の急速な増大に比して、雑誌媒体での共同研究の総覧的発表機会が少ないままである、という現在の学術研究環境の構造的欠損への対応という意義があるといつて取ることができるだろう。

近年の日本社会学会大会でのテーマセッション数の急速な増大は、日本の学術世界が政府の「イノベーション促進的学術政策」の影響を受けていることの証拠としての側面をもつものである。というのも、じつはこの傾向は、日本社会学会だけではなく、他の諸学会でも起きていることであり、更にそこには、「科研費改革 2018」等での政府の学術政策の方向との方向的一致を見て取ることができるからである。我々は日本社会学会のテーマセッション数の増大に先行して、日本質的心理学会大会での「会員企画シンポジウム」の増大や、日本保健医療社会学会大会での「ラウンドテーブルディスカッション（R T D）」の増大を記録から確認でき、かつ、そのかなりの部分が「イノベーション志向的」であることを確認できるだろう。

政府の「イノベーション促進的学術政策」によって、いまや個別の研究者は、単に既存の研究領域内で自身の研究を位置付けるだけでなく、既存の研究領域の編成そのものを革新する側面が、自らの研究の中にあることをも主張することを強いられてきている。

この目的に合わせて、諸テーマセッションが企画・開催されているのである（先行的変化は、研究助成金の枠組において生じていたというのが、樫田の見立てである。2026年春刊行予定の『オープン・ソシオロジー』誌創刊号に関連記事を掲載する予定である）。

その一方で、学会誌という論文掲載媒体の部分では、助成金をもらってのイノベーション的な活動成果の総体を学術誌に掲載して示す、という機能を果たすような方向での変化は十分には生じていない、という「欠損状況」が存在している。そこに、本誌のような学会機関誌ではない学術雑誌の存在意義がある、ともいえよう。

4 今回のショッピングリハビリ特集の位置と意義

紙数が尽きてしまった。今回のショッピングリハビリ特集は、上記の 2 つの流れが合流して成立している。第 1 に本特集は、摂南大学での第 76 回関西社会学会大会の自由報告部会での連続報告（樫田報告、加戸報告、堀田報告）を基盤としている。第 2 に本特集は、日本学術振興会科学研究費（挑戦的萌芽研究、課題番号 23K17573）を基盤としている。そして、これまでの本誌の特集と同様に、社会学が学際性に開かれたものであることを訴える特集としての側面と、ショッピングリハビリ研究が、研究の「イノベーション」に繋がるものであることを訴える特集としての側面の両方をもっている。熟読玩味してほしい。

✉✉✉° '3\Üî .. 23 ••>•EKrM,

今号では複数の論文（加戸論文、真鍋論文、岡田論文）に**360**度全方位ビデオカメラが出てきます。**360**度全方位カメラは、岡田（**38**頁）が言うように「多視点カメラ」です。すなわちソフト的な操作によって、事後的に視点を自由に設定した**2**次元動画を創り出せます。**360**度ビデオカメラを複数台用いた調査データなら、少なくとも視覚的環境に関しては、環境全部をまるごと保存したデータであるといえるでしょう。しかし、この「まるごとさ」は調査にとって朗報でしょうか。簡単にはそうとは言えないと思います。それは、ビデオカメラの「画角」が「視野範囲類似的志向性」を失ったことによる困難を我々は無視できないからです。じつは、これまでのビデオデータを用いた研究は、自覚しない形で、この「視野範囲類似的志向性」を活用して研究をしていました。我々の眼は、世界を視野的に切り取る働きをしていて、そこに、志向性の根拠も、視線を向けられたことに対する反応の根拠もあったのですが、ビデオカメラがとらえた映像を分析する際にも、我々は、人間の眼の働きにおいて有意味化していた諸概念を、ほぼそのまま流用していたのです。これまでのような野砲囃な流用は今後はもうできないかもしない……。これは、ビデオを利用した人文・社会科学的研究の危機です。しかし、この現在の危機的状況には解放の側面もあるかも知れないということを、岡田論文は訴えています。じつは、他の論文（堀田論文、藪本論文、松浦論文）も、見ること／見られることにかかわる論文です。普通の障害経験の語りとは違う位相から「ろう者の語り」を分析した飯田論文同様、本号には、我々が世界を知るためにどのように感覚器的常識を生きたり、生きなかつたりするべきか、に関して示唆的な論文が集まっています。本号もどうぞお楽しみ下さい。なお、本号掲載の特集は、ショッピングリハビリ共研究（科研費**23K17533**）の成果の一部です。ファンド提供者に記して感謝します。（Y.K.）

'B\Üî øø\$(&2025 °Ø'

¤¤\$(\$x8üäñÊ&¤!±Û'

¶¶\$ (8¶ä>¶&¤!+Û' * ääÉ>Ê&ðYY\ ↗ +Û'* ¶^mFÊ&¤!+Û'

...8§pÄÊ&H£ÛT±Û'

..; |8±ä¬d&; ⊗Ø, μ±Û'

'\beta\hat{\wedge} .. 23 \square

2025 ° 10 v 31 ¥†•

Îñd 572-8508 +007•lwåñpë 17-8

g|+Û 'æk ÛÛ ?

卷之三

AUTAX8072-800-5589&#aE e-mail:kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN82188-9848 ONLINE ISSN82188-9856

<https://gensho-kashidayoshio.sakuraweb.com/> & 0^?}§§^_~rks'